

# 高松寺跡

## 1、調査にいたる経過

周知の埋蔵文化財包蔵地である高松山経塚の一部である高松寺跡を横切って林道が開設される旨、花巻市農地林務課より連絡をうけ、昭和62年8月より調査に至ったものである。既に前年より当該課とは何回か協議を重ね可能な限り中心部と想定される平坦部分を避け、傾斜面へ迂回することを設計協議を図ったものであり、当時としては主要部分は保存されたものと考えられたものである。

本調査においては、花巻市農地林務課及び当該施工業者である(株)船野組には多大のご協力をいただいている。又地元の次の方々にも特段のご協力を得ている。佐藤芳邦、中屋敷光雄、佐藤敏子、山田カン、柳田篤子、神山美代子、柳田ノブ、中屋敷文子、渡部ヒサ、川村善一、渡部公一、佐藤クニ、佐藤絹子、調査期間昭和62年8月27日より9月8日までをA区とした岩根神社参道の西側部分を、同12月にB区である東側部分について実施している。調査は花巻市教育委員会藤井敏明、根子英郎が担当した。調査対象面積約1,000㎡であるが、現況は山林でしかも傾斜面であるため機械の導入に制約があり、全面発掘には及ばなかった。調査は林道基本杭MC4とNo20を結ぶ線を基準としてグリッド方式を採用した。なおこの基準線は磁北より69°44'40"東方に傾いている。

## 2、地形・地質

本遺跡は、標高200mの山地であり、北上山地の西縁部分に当る。花巻市中心市街地より東方約6kmの地点で猿ヶ石川から北東約2kmの火山性安山岩質よりなっている。

高松寺跡は、高松山経塚があった高松山の南側斜面に位置しており、現在は岩根神社があるが、古くから観音堂があり溝中の参詣の盛んなところでもある。

本遺跡の北側約2kmの胡四王山には、やはり同様の地形で遺跡があり昭和38年に発掘調査がなされ、南側斜面に竪穴住居址などが検出されている。

いずれ周辺は、見渡す限り山間部となっており、低地に住宅や耕地が見下せるに過ぎない。

## 3、調査結果

今回の調査では、周溝1基、pit1基、竪穴住居址1棟が検出されている。

A区 林道開通予定地の高松寺跡の南側斜面より検出している周溝の一部1基がある。調査区域外のため全体を調査できなかったが、北側のほぼ半分位は検出できたものと思われる。

周溝は馬蹄形になるか方形かあるいは円形になるのか不明であるが、地形としては平地から傾斜面へと転換して間もなくの傾斜部であり、上巾1.5m、下巾約50cmであり深さは、中心部の平坦面より40cm内外の一定を保っている。当然のことながら中心部と思われる平坦部及び周溝の底部はほぼ一定のレベルであるが、周溝の外縁は地形に合わせて起伏がある。

周囲の層序は最上層には傾斜地のため流れ込んだ表土が入り、その下には黒色土があり、その下

には更に黒褐色土が積もり地山の粘土へと続いている。埋土としては軟らかい黒茶色土が入り、この内には墨粒、焼土、土器片などを少量ずつ含んでいる。最下層には地山の土を含んだ軟らかなバサバサした層が入り込んでいる。

検出した部分では、外径約11m、内径約7mの周溝であるが、性格は不明であった。この遺構の中心部と思われる部分からは、特別な人為的な痕跡が認められなかった。

この周溝及び主体部と思われる部分からは土師器の破片が出土している。

周溝の埋土からは、いずれも土師器の破片が出土しており、実測したものは土器底部を主としたものである。共通しているのは、ロクロ整形であり底部は回転糸切を施したものであること。また色調は橙色及び明黄褐色を呈して胎土・焼成とも良好である。また一部高台付坏もありこれは内黒処理している。

また、この周溝の内側で主体部と思われる部分からは、やはり土師器の破片と須恵器の破片1点が出土している。いずれも平垣部上の覆土内からであり、地山面上からは少ない状態である。それによると比較的残存割合の良い坏底部の破片についてみると全て回転糸切り痕を残し一部にはその後再調整をしているものもある。内面処理として黒色処理をしているものも数点あるが、全てロクロ調整である。色調は橙色を主としており一部には白灰色のものもある。

この周溝の外側で西方に直径約80cm、深さは表土より約95cmのp i tが1ヶ検出されている。このp i tは、殆ど表土直下より掘り込まれており埋土は周囲より一段と軟らかく焼土・炭粒・土器小破片が若干ながら混じっていた。

この埋土からの出土遺物は土師器の破片のみであるが、いずれも坏でロクロ調整が施されてある。底部の破片には糸切り痕がうかがえる。

周辺にはこのようなp i tは検出されず只1ヶのみである。

以上、遺構からの出土遺物については上述のとおりであるが、このA区では調査区域西側の林道が大きく迂回する地点から大量の土器破片及び焼土が検出された。殆ど土師器のみでありしかも小破片であり完形品はまずない。それも北側の平垣面から南側の傾斜面へと転換して間もなくのやや傾斜の緩い位置で地山面直上からの検出である。しかしこれらに伴う遺構は確認されなかった。

**B区** 岩根神社参道より東側一帯を調査区域としている。竪穴住居址の一部を検出している。調査区域の南側で比較的平坦面では、遺構等は検出できなかったが、斜面の急な林道基準抗No23付近で竪穴住居址の主にカマドを中心として検出している。

一辺が推定3.5mの規模で北側斜面の方向に向けてカマドを有している。竪穴の北東隅が標高が最大となっており、南西側で最小となる傾斜面である。カマドは袖部分が西側しか遺存せず東側は欠けているが、40cm大の山石で内部を構築しており焚口部分は焼土が入っている。

このカマドには煙道部分として竪穴の外側へ張り出したところがなく、傾斜面の壁の立ち上がり

を利用して。従って焚口部分から竪穴住居址の壁面部分には火をうけた痕跡を残している。

壁面の立ち上がりは大きいところでは約60cmから小さい場所では約10cmと地形の影響で変化が激しい。北側の壁面のほぼ中央にはカマドが付き壁の立ち上がりがこの高松山の斜面へと続いている。床面はほぼ平垣で特に柱穴のようなものは検出されていない。

この竪穴住居址の埋土には多量の炭、焼土が混入しており土器小破片も含まれているが、遺物の主なものは、カマド周辺からの出土である。

#### 4、まとめ

この高松山に存する岩根神社は、江戸時代には観音堂であり、明治になって岩根神社と改称されている。今の神社の拝殿はかつての観音堂であった。

この神社より上方で現在は新しい観音堂が建っている丘陵上の経塚から出土したとされる常滑の壺が市指定文化財となっている。平安期の作品ともされているが、観音堂の建設と関係があったものと思われる。

古記録によると往古この地真言古規の山にて高松寺は一山の惣寺号で、一山の繁昌亦類いなしとうたわれた。また経塚があって一字一石の経塚といわれてもいる。この高松寺が故あって隣村の鞍掛地区に移った年月等委細は不明であると伝えてある。

往古の高松寺は其の跡皆坊として言い伝えられ七坊あったという。西大坊、東大坊、東禅坊、月向坊、ならい坊、本坊、明ヶ沢坊で「西大坊跡は観音の下少し西の方の出崎なり、この大坊是亦大いなる寺場なり、其の外大小坊舎の跡幾何という数を知らず」となっており、今回の調査では、この西大坊跡には手つかずのままに周辺の調査を実施したものである。

(しかし、高松寺跡として発掘調査を実施する際、林道開発の時には可能な限り西大坊跡とも想定される平垣部(畑地利用の際礎石を取り除いた跡があった)は保存できたと考えられたが、平成元年秋には、この主要部分が開削されてしまったのは誠に残念である。観音堂の規模を含めかつて繁栄を誇ったこの高松山文化の姿は、古代仏教寺院の実態を解明するに恰好の資料ともなるべきものであった。)

調査の結果は、多量の土師器を主とする破片が出土しており、他に周溝、p i tなどであり竪穴住居址の一部なども検出されている。

出土遺物から判断すると、いずれもロクロ整形を基調としたものであり、甕坏及び高台付坏がほとんどである。なかには内黒処理を施しているものもみられる。底部の処理は回転糸切り痕を鮮明に残すものが多い。

以上の土師器群は、高橋氏の編年Ⅳ群(1982『岩手の土器』)を中心とするものが多く、9~10世紀代の頃と思われる。

高松寺の創建乃至繁栄の時期が、文献では明確になし得ないが、従って観音堂に伴う観音信仰のたかまりもこの高松山一帯を古来より高松山の七不思議として地域民からは畏怖され、敬愛されてきた所以も、古常滑を出土していることなどから、相当時代がさかのぼることができるものと思われる。

